

なぜ失業が貿易理論から消失したのか（報告要旨）

田淵太一*

2025年10月5日 日本国際経済学会・第84回全国大会（中央大学）
第6分科会 企画セッション「新国際価値論は失業をどう捉えるか」第3報告

本報告は、貿易理論からなぜどのようにして失業を捉える視点が消失したのかを探る試みである。リカードから現代までの貿易理論の歴史は、近年の研究によって、リカード貿易理論は、J. S.ミルによる相互需要説の考案、およびハーバラーによる生産可能集合の導入を2つの画期として、純粋交換の理論へと変型されてきたことが明らかにされた。貿易理論から失業を分析する視点が見失われた歴史は、この変型プロセスとほぼ重なっている。本報告では、このプロセスを逆に遡りながら、まずハーバラーが導入した生産可能集合によって失業の分析が貿易理論の枠組みから原理的に排除されてしまったことを示し、次に J. S.ミルが相互需要説において需要供給価値説にもとづく価格調節の理論に転回したばかりでなく、事実上、ハーバラーに先駆けて生産可能集合を想定していたことを明らかにする。最後に、リカードの貿易理論が自然価格にもとづく数量調節の理論であったこと、貿易利益を「労働の節約」と捉えるリカードの貿易理論には、彼の機械論と同様に、技術的失業の視点が含まれていたことを示す。

* 同志社大学商学部 ttabuchi@mail.doshisha.ac.jp